

日本古典全書

平中物語・篋物語
和泉式部日記

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
和辻哲郎
津田左右吉

平中物語
和泉式部日記
篁物語

山岸德平校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書第九十回配本

「平中物語・和泉式部日記・

篁物語」 © 山岸德平校註

昭和三十四年五月十月初版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 三二〇圓

目次

平中物語	一
------	---

解説	三
----	---

色好み平中	三
-------	---

平中物語の存在	七
---------	---

平定文の傳	二二
-------	----

凡例	二三
----	----

本文	二五
----	----

和泉式部日記	一一
--------	----

解説	二三
----	----

題號	二三
----	----

作者と成立年代	二四
---------	----

内容と價值	二三
-------	----

諸本	一五
----	----

次

篁

平
中
物
語

山
岸
徳
平

解 説

色好み平中

「在中・平中としてつがひて世のすきもの」と言はれた由は、十訓抄卷一に見えてゐる。その在中とは、有名な在原業平のこと、平中とは、この物語の主人公たる平定文のことである。平中は業平と共に「すきもの」の雙璧と目された人であつた。しかし、業平が、理想的なまことのすき者として、時代が下るに従つて、ますます戀の英雄化されたのに對し、平中は、説話化されるに従ひ、徹底的に戲畫化され、戀のために譏弄される、言はば道化的存在として扱はれたのであつた。

すでに源氏物語にもその傾向は見られる。それは末摘花卷の、源氏が幼い紫の上と雛あそびなどをしてゐる場面である。ふざけて源氏が自分の鼻の上に紅を塗り、拭いても拭いても取れないふりをして、紫の上に氣をもませる。紫の上が硯の水で紙を濡らして、取つてやらうとすると、「平中がやうに色どり添へ給ふな。赤からはあへなん」と冗談を言ふのである。それは、平中が女の許で、自分の切ない氣持を見せ

ようとして、硯の水入れの水で目を濡らしては泣いた。女がそれを見破つて、水入れの中に墨を入れておいたところ、平中は知らずに、また例の如くにして泣いた。今度は顔が眞黒になつた、といふ失敗談を踏まへての冗談である。河海抄には、右の話を引用して、宇治大納言物語とか、大和物語とかに、その話がある旨を記してゐるが、現在のところは、古本説話集にそれと同系の話があるほかには、全く見當らない。しかし、その話がどういふ形で傳承されたか、またそれはそれとして問題があるにしても、とにかく紫式部の時代に、それが冗談として通用したといふことは、大變興味深いのである。

十世紀中頃——といふと平中歿後二・三十年——その頃に成立したかと思はれる大和物語には、現存傳本に關する限り、河海抄が引用してゐるやうな、平中墨塗りの話を見出すことは出来ない。しかし、ほかに四つほど、平中に關係のある話が取られてゐる。大和物語は、言ふまでもなく歌を中心としたゴシップ的な小話を、百數十段にわたつて集めたものである。そのほとんどが、實在の人物の話として、左の如く取り上げられてゐる。

平中、閑院の御にたえてのち、程經てあひたりけり（四十六段）

平中、にくからずおもふ若き女を、妻のもとに率てきて置きたりけり（六十四段）

平中が、色好みけるさかりに市に行きけり（百三段）

本院の北の方の、まだ帥の大納言の妻にいますかりける、平中がよみてきこえける（百二十四段）

以上は平中に關係のある章段だけを引用したのであるが、他の段でも、具體的に人名をあげてゐるといふ點では、大體同じである。しかし、ここで注目されるのは、その人名のあげ方である。ただ「平中」と言つただけで、そこには、平中に關する何の説明も施してゐない。大和物語全體からいふならば、それは何も平中だけに限つたことではないが、しかし、「備前の掾にて橘良利といひける人」とか、「右馬の允藤原の千兼といふ人の妻には、としこといふ人なむありける」とか、あるいは「故右京の大夫宗于の君」とかいつた表現の方法もないわけではない。單に「平中」とだけ言つて、何の説明もなしに、單刀直入に物語に入つていく。それに類した「野大貳」「三條の右のおとど」「堤の中納言」などの如きも、決して少くはない。けれど、とにかく、餘計な説明がなくても、讀者はその人物について熟知してゐて、ゴシップを樂しむのに何の支障もなかつたのであらう、といふ事を考へなくてはならない。

要するに、かういふ物語が、いかに狭い社會で製作され、享受されたかといふこと、また、さういふ社會の中で、いかにしばしば平中のやうな人達が、人々の口の端にのぼつたであらうかといふことなどについて、多少とも考へなければいけないと思ふのである。「平中」と言つただけで、恐らくその當時の人々は、すぐに「ああ、あの色好み……」と分つたのだらう。さまざまイメージがすでに描かれてゐた。そして、次から次へと平中が語られていく時、そこに新しいイメージが生れ、更に尾ひれがつけ加へられていつた。小さな部分でもふくれあがるものがあり、大きな部分でも削られるものがあつた。いかにもあ

りさうな話が新たに附加されていつた。源氏物語の讀者達も、すでに幾通りかの平中の話を知つてゐた。それで「平中がやうに色どり添へ給ふな……」と、思はず口元がほころんだのであらう。

今昔物語集・宇治拾遺物語・古本説話集・十訓抄・世繼物語などには、さういつた幾つかの平中説話が收録されてゐるが、そのほとんどが、先の墨塗り譚と同じやうに、戲畫化され、滑稽化されてゐる。

本院侍従といふすばらしい女房がゐた。いかに平中が言ひ寄つても、靡かないばかりか、消息の返事さへもよこさなかつた。「人の妻娘、いかに況んや宮仕へ人は、此の平中にもいはれぬはなくぞありける」(今昔物語卷三十)といふ状態だつた平中が、「ただ『見つ』とばかりの二文字をだに見せ給へ」と、泣かんばかりに書いてやつた何度目かの手紙は、やつと彼女の返事によつて報いられた。しかしそれは、「見つ」といふ、平中の手紙の一部分を切り取つて、別の薄様に貼りつけた、ふざけたものであつた。

ままと女の許に忍びこんで、今まさにわが手に落ちなんとする寸前、見事に女にしてやられる人のよい平中。又はかられて、香をねり合はせて作つた樋宮ひのみやのものを嗅いでみたり、たまたま女を得たと思へば、公用のために行けなくなつたあげく、うつかり便りもしなかつたので、女を悲しませ、つひには尾にさせてしまつたといふ、まことにうかつな平中である。近代でも芥川龍之介は「好色」に、谷崎潤一郎は「少將滋幹の母」に、さういふ平中を描いた。それらは、すべて戲畫化された平中であつた。次ぎは芥川を描いた「色好み平中」のイメージである。

秦平の時代にふさはしい、優美なきらめき烏帽子くさむしの下には、下ぶくれの顔がこちらを見てゐる。そのふつくりと肥つた頬に、鮮かな赤みがさしてゐるのは、何も胭脂おんじをぼかしたのではない。男には珍しい餅肌もち肌が、自然と血の色を透すかせたのである。髭は品の好い鼻の下に、——と云ふよりも薄い唇の左右に、丁度薄墨を刷はいたやうに、僅ばかりしか残つてゐない。しかしつややかな鬢げんの上には、霞も立たない空の色さへ、ほんのりと青みを映してゐる。耳はその鬢のはづれに、ちよいと上つた耳たぶだけ見える。それが蛤はまぐりの貝のやうな、暖かい色をしてゐるのは、かすかな光の加減らしい。眼は人よりも細い中に、絶えず微笑が漂つてゐる。殆どその瞳の底には、何時でも咲き匂つた櫻の枝が、浮んでゐるのかと思ふ位、晴れ晴れした微笑が漂つてゐる。が、多少注意をすれば、其處には必しも幸福のみが住まつてゐない事がわかるかも知れない。これは遠い何物かに、愉悦とらけいを持つた微笑である。同時に又手近い一切に、輕蔑を抱いた微笑である。頸は顔に比べると、寧ろ華奢きゃしゃすぎると評しても好い。その頸には白い汗衫かざみの襟が、かすかに香を焚きしめた、菜の花色の水干すいかんの襟と、細い一線を畫かいてゐる。

平中物語の存在

本朝書籍目錄の假名部に「平中日記一卷」とあり、また河海抄の註の中にも「貞文日記」といふ名稱が

見える。すでに述べて来たやうに、平中に關するいろいろな物語は、そのほとんどが説話といふ形をとつて、一つの説話集の中に、他の澤山の説話と同じやうに收録され、現在に傳へられたものであつた。平中日記とか、あるいは貞文日記とか呼ばれるものは、さういふ片々たる一説話ではなくて、少くともその「一卷」は、平中だけに關する書物であるはずであつた。

靜嘉堂文庫藏の「平仲物語」一帖は、縦十七樞、横十六樞、枳形本綴葉裝。題簽は後人の筆で、表紙中央に「平仲物語 冷泉爲相卿筆」とある。鎌倉時代の書寫であるが、傳爲相筆と稱すべきものである。内容は伊勢物語と同じやうに、歌に關する小話三十數段（數へ方によつて違ふ。三十七〜四十段）より成つてゐる。先にあげた、女房が尼になる話や、「見つ」問答の原形となるやうな話も含まれてゐる。しかしそこに描かれた平中像は、決して説話物語のそれではない。意志が弱くて、それでゐながら女にもてる男、勿論、後の滑稽譚に發展する要素はそこにも十分認められるのであるが、とにかく、まだまだ道化的な存在とするには遠すぎる。説話化の十分に進んでゐない段階とも考ふべきなのであらうか。各段の主人公はすべて「男」である。稀に「平中」「國經の大納言」などの固有名詞が散見するが、それは極めて例外的な事柄であつて、大和物語におけるがごときゴシップ性は、そこには殆ど見られない。抽象化された「男」による全篇の統一は、少くとも、より純粹な物語への方角であることは間違ひない。最初の段が「今は昔」ではじまり、その他はすべて「又この男」「同じ男」「さてこの男」「又この同じ男」などでは

じまつてゐるといふことも、その意味で大變興味深いのである。一つ一つは、皆それぞれに獨立した小話である。しかしながら、「主人公は皆同一人物なのです」といふ、それは、わざとつながりを持たせた表現形式なのである。そして冒頭には、物語の常套句である「今は昔」を持つて來て、全體に、あるまとまりを與へた。小話を集めた物語形式としては、大變進んだ技法ではある。が、そのまとまりは、あくまでも形式の上でのことであつて、内容的に、「男」の生涯を辿り、「男」の生を全圓的に描いたと言ふて、いものではない。ちやうど伊勢物語が、「昔、男」あるいは「昔、男ありけり」と、各段がそれだけではつきりした一つのまとまりを持ち、少くとも形の上では、餘り密接な全體的つながりを示してゐないにも拘はらず、構成の上で、うひかうぶり初冠からその死までと、一往、内容的まとまりを見せようとしてゐるのとよい對照である。しかし萩谷朴氏の所説のやうに、「一見、單なるエピソードの羅列にすぎないで、構成の上では何の配慮も見られないと思はれる平中物語も、實は各章段に四季の順序を逐つてゐる形跡が認められる」といふ點も、たしかに十分注意しなければならないと思ふ。それは後に成立の項でも觸れるやうに、物語の母胎になつたかもしれない定文集の存在が、そこから當然考へられるからである。

平中物語はいはゆる歌物語の系列に屬してゐる。歌が中心であり、それに附隨する物語は、歌によつて、存在する。歌は物語展開の契機であり、媒介であり、聚約であつて、歌によつて事件が發展し、あるいは結末に導かれる。歌の占める位置が、單に物語のアクセサリー的な存在に過ぎない作り物語や説話物

語などの場合と、それは根本的に違ふ點である。しかしこの平中物語と、歌物語における模式的な伊勢物語とを比較した場合、相對的な意味において、平中物語は説話性が強まつてゐるといふこともまた事實である。歌物語といふ形態が、その發展の過程において、作り物語や説話物語の影響を受けないであつたとは誰も保證は出来ない。時代が下るに従つて、ますますその傾向は強まつていつたに違ひない。一般的な表現の仕方をとるならば、それは、抒情的な詩精神から敘事的な散文精神への移行であつた。歌物語である平中物語が、その歌物語としての純粹さを、幾分なりとも失つてゐたといふ事については、やはり時代の推移を離れて考へることは出来ない。しかし、すでに述べたやうに、物語の中での平中そのものの像は、説話物語のその如く、まだ明確に戲畫化され、滑稽化されてはゐない。時代の推移といつても、従つてそこに、餘り大きな隔たりを認める事は出来ないであらう。

平中日記とか、あるいは貞文日記とか呼ばれてゐるものが、一體この平中物語とどういふ關係にあるもののであらうか。河海抄夕顔卷「かかる道の空にてはふれぬべきにや」の註に、

貞文日記云、立ちてゆく行方も知らずかくのみを道の空にてまどふべらなる
とあり、また、檳柱卷「ほふしれて物し給」の註にも、

貞文日記云、定かにはあらず、なまほきたるものから云々、又云、かの文傳へたるは、人はもとよりすこしほきたるやうに覺えければ云々

とあつて、たまたま「貞文日記」なるものの本文が引用されてゐるのは、注目すべきである。なぜなら、現存「平仲物語」に、それぞれ、

たちてゆく行ゑもしらすかくのみそ道のそらにてまとふへらなる（二十五段）

又このおとこものたよりにいときたかにはあらずなまほきたるものから……中略……このふみつたふる人はもとよりすこしほきたるやうにおほえければ……後略（十八段）

とあり、兩者の關係が密接なものであることが認められるからである。有名な平中墨塗り譚が河海抄に引用された時、「宇治大納言物語云……中略……大和物語にも此事あり」とあつて、「……大和物語、貞文日記にも此事あり」となかつたのも、實際にその話を持たない現存「平仲物語」から推察するならば、單なる偶然や誤りではあるまいと思はれる。河海抄が参照した「貞文日記」にも、恐らくその話はなかつたのであらう。伊勢物語と在五中將日記とが同じものであり、篁物語と篁日記、多武峯少將物語と高光日記、あるいは和泉式部物語と和泉式部日記とが、それぞれ同じ作品であるやうに、貞文日記と平中物語の場合も、やはり名稱は違ふけれども、同一作品と考へて差支へない。現在われわれは、この靜嘉堂に藏せられてゐる一本だけしか目にすることは出来ないが、季吟の大和物語抄の卷末に附載されてゐる平中說話、ならびに御巫本系大和物語の百七十二段から百七十三段の間に挿入されてゐる平中說話は、それぞれ數段づつであるけれども、明らかにこの平中物語所載の說話と同じものであり、その斷片かと思はれるのであ

る。本文はいづれも異同を有しており、他の物語、家集などと同じやうに、やはり平中物語も、いくつかの、異本とまでは言はれなくても、異同ある本文を持つ諸本は存してゐたのであらうと思はれる。それが、どのやうな事情によつてか、ほとんど散佚の状態にすらなつた。そして、明治・大正時代は勿論、恐らく、江戸時代においても、その存在は杳として知ることは出来なかつた。

平 定 文 の 傳

延喜五年（九〇五）、古今和歌集が貫之らによつて撰せられた頃、定文は歌人として活躍し、その名が知られてゐた。いはゆる六歌仙時代も過ぎて、和歌がやうやく隆盛におもむく時に、それは當つてゐた。

定文が歿したのは延長元年（九二三）九月二十七日。生年は明らかでない。三代實錄によると、貞觀十六年（八七四）十一月二十一日、定文は父好風とともに、平姓を下賜され、臣籍に下つてゐる。それを上疏したのは祖父茂世王であり、茂世王は仲野親王の子、仲野親王は桓武天皇の皇子である。

要するに定文は、少くとも貞觀十六年以前に生れ、歿年は五十歳か、あるいはそれ以上になつてゐたことは疑ひない。桓武天皇から數へて五代目、いはゆる王統腹の貴公子であつた。桓武――平城――阿保親王といふ系譜を持つ在原業平と、その點は大變よく似てゐる。しかし官人としての定文は、業平同様、あるいはそれ以上に低いものであつた。古今和歌集目錄その他によれば、はじめて内舍人^{うちねり}に任ぜられたのが